広辞苑 第七版の凡例

記 号 表

見出し語

-	語構成の区切り
・	活用語の語幹と語尾の区切り
【　】	漢字または外来語の綴り
〖　〗	品詞及び活用の種類など
文	文語形

解説

①②③…	語義の区分
❶❷❸…	大きく分類する場合の区分
㋐㋑㋒…	細かく区分する場合の区分
一二三…	品詞あるいは活用の種類の区分
〔　〕	専門学術用語の分野
［　］	漢語の出典
《　》	漢字の使い分け
◆	現代よく使う漢字の使い分け
〈季 春〉	季語　*1
（　）	注釈、書名、原語など
⇨	解説はその項目を見よ
→	その項目を参照せよ
↔	対義・反対語
▶	現代語の用法についての注記
➡	親項目、追込項目

*1　季語をクリックすると、同じ季節の季語を探せます。
また、「季語」と入力して検索すると、季語インデックスを表示します。
季語インデックスからは、春・夏・秋・冬・新年の季語を探せます。

略 語 表

品詞

〖名〗	名詞
〖代〗	代名詞
〖自〗	自動詞
〖他〗	他動詞
〖形〗	形容詞
〖連体〗	連体詞
〖副〗	副詞
〖助動〗	助動詞
〖助詞〗	助詞
〖接続〗	接続詞
〖接頭〗	接頭辞
〖接尾〗	接尾辞
〖感〗	感動詞
〖枕〗	枕詞

活用の種類

五	五段活用
四	四段活用
上一	上一段活用
上二	上二段活用
下一	下一段活用
下二	下二段活用
カ変	カ行変格活用
サ変	サ行変格活用
ナ変	ナ行変格活用
ラ変	ラ行変格活用
ク	ク活用
シク	シク活用

学術語・専門語

〔哲〕	哲学
〔論〕	論理学
〔心〕	心理学
〔宗〕	宗教
〔仏〕	仏教
〔神〕	神話
〔史〕	歴史
〔法〕	法律
〔経〕	経済
〔教〕	教育
〔社〕	社会学
〔美〕	美学・美術
〔言〕	言語・音韻
〔文〕	文学
〔音〕	音楽
〔数〕	数学
〔理〕	物理
〔化〕	化学
〔天〕	天文
〔気〕	気象
〔地〕	地学
〔生〕	生物
〔植〕	植物
〔動〕	動物
〔医〕	医学・薬学
〔機〕	機械工学
〔電〕	電気工学
〔情〕	情報科学
〔農〕	農林
〔建〕	建築・土木

●クラウド辞典版は、書籍版とは字体や約物、書式など一部異なります。
●出典の書名・作者名は、略称ではなく正称または通称で記載してします。
●書籍版にはない挿図や写真も収録しています。
●書籍版の付録（別冊）は収録していません。
●以下のページは、書籍版をそのまま収録しています。

自　序〔第一版〕

いまさら辞典懐古の自叙でもないが、明治時代の下半期に、国語学言語学を修めた私は、現在もひきつづいて恩沢を被りつつある先進諸家の大辞書を利用し受益したことを忘れぬし、大学に進入したころには、恩師上田万年先生をはじめ、藤岡勝二・上田敏両先進の、辞書編集法およびその沿革についての論文等を読んで、つとに啓発されたのであった。柳村上田からは新英大辞典の偉業の紹介を「帝国文学」の誌上で示され、目をみはって海彼にあこがれた。われらもいかにしてか、理想的な大中小はともかくも、あんなに整った辞典を編んでみたいものだと、たのしい夢を見たのであった。

かくて、英米独仏の大辞書の完備に対して限りなき羨望の情が動き、ひたむき学究的な理想にのみふけりつつ、青春の客気で現実的方面については一層暗愚であったことは、後年とほぼ同様であった。卒業後の三年めの明治三十五年（一九〇二）から凡そ五年間、それぞれの大辞典の編著や統理に成功を収めた上田・大槻・芳賀・松井等の諸先覚には、他方において国語の研究や調査や教育や改善やの諸事業にわたって計るべからざる種々の資益を得たことが、かれこれと想起されてくる。とりわけ、上田・松井両博士の「大日本国語辞典」と、大槻博士の「大言海」とに関しては、身親しくその編集室に見学した縁故もあったのみか、殊に後者の校訂には深く参与し、前者の再刊に際しては僅少ながら接触したゆかりもあって、自分のためにも、何かと参考に資せられて幸福であった。その後も、かれこれ二つばかりの辞典の編集に参画はしたものの、元より綜合統理の任に当った次第ではなかった。それに反して、自分の仕事は、主として語原や語史、語誌や語釈の、主として分解的な、しかし根本的本質的な方面の考究に専念し、綜合的方面の事業に意を致し力を注ぐまでには至らなかった。それは、自分自身の研究が、当初は

音韻および文字に、やや進んでからは漸次語法や語義に及び、後年には段々と語誌に向って来たのであって、要は分解を主とし、綜合にうとかった。

今から二十年前、私の辞典の処女作が出来て、望外の歓迎を受けたが、内心大いに満足し得ず、「言海」の著者が、古く率直にその巻末に録しておいたごとく、そんなに良く出来あがったものは無く、ただ直してゆくばかりだ、と思って、すぐさま改訂の業を起し、或は簡約し、或は増訂し、同時に業を進めて、大戦の末期に入り、改訂版の原稿が災厄に帰した。簡約版は衆知のごとく、早く印行して世に出でたが、しかし私に代って戦時中には、統理の傍ら、他方には、新たに、語詞の採訪と採集とに力を尽くしつつ専ら改訂の業に従った私の次男猛は、苦心努力の結果、辞書編集上、望外にもこよなき良い経験と智識とを得たかと信ずる。彼自身もまたフランスの大辞典リットレないしラルース等の名著およびダルメステテール等の中辞典から平素得つつある智識を、他山の石として、乃父の改訂「辞苑」旧版本の礎石の材料にも供してくれた。彼は従前のごとくには、今回の「広辞苑」の編集に関して、協力する余裕は十分でなかったが、名古屋大学の行余の力をこれに注いでくれ、老父の能くせざる所を補足し、編集および印刷の進行、人事その他各般の統理に心を尽くしてくれた。現代の国語に対する智識と感覚とについては、当然長所の在ることは認めてよろしく、その点において、むしろ語史にのみ傾倒せる編者の粗漫な一方面を補佐してくれたことを付言したい。また、グリム兄弟の場合とは、全く違った情味が存する。

以上、主として改訂「辞苑」の進行および始末について述べつつ、その善後の処理に及ばんとしたが、戦後その改訂版の長所を保存し、短所を除去し、内容形態共に新時代の要求に応ずる必要上、根本的修正と増補とを施すことを得たのは、昭和二十三年九月より岩波書店内に設置された編集室において、斯業の経験と智識とを具備する市村宏氏を編集主任となし、終始一貫、増訂の業を進めたことによる。爾来、編集部はこの複雑な編集に従事し、その間いくたびか内員外員の増減変動と場所の転移等とを見たが、書店内外よりの定期臨機に嘱託された諸員諸君の

格別なる協力に依って、編集すでに了り、校正および修治の業、将に完成せんとするに至ったのは、まことに欣懐といたす所である。

抱負と実行、理想と現実、その間、自分の未熟か老境かよりして、事志と違った趣きがあることを自省してやまないが、とにかく、簡明にして平易、広汎にして周到、雅語漢語、古語新語、慣用語と新造語、日用語と専門語、旧外来語と新外来語、新聞語と流行語、みなつとめて博載を期した。発音の正確と語法の説明には意を注ぎて、規範を示さんと欲したけれども、現在の規範こんとんとして未だ定まらぬ不便をなげかねばならなかった。

誇称してもよいが、われら父子が親交ある哲学・史学・文学の先進同友をはじめ、今日の科学界に令名あり世界的栄誉をも博せられた碩学者より、直接にも間接にも指示を受けた語詞の説明も少なからず存し、花さき実のれる、この言語園を展望しながら、感激してやまぬ心境に在るのである。従来の経験により、あとからあとから、自他の注意から、種々補修を要することが、殊に一般辞書の上には生じがちなのを按ずるが、さりとて先進の辞典学者の引いた言葉にたよって、あのラテン語の金言や、ゲーテの箴言にもあるがごとき、過まるは人のつね、容るすは神のみち、とやら申された遁辞めいた文句にすがる気はない。ただ周密な眼光をもって徹底的に過誤なきを期したばかりである。

もしそれ、物の順序からすると、大辞書が先きに出来あがってから、その後に、それらの成果を収拾し抜萃し、簡易に平明に、短縮して編集してこそ、より完全な中小辞典、簡短（ショーター）とか、要略（コンサイス）とかの文字を冠らせた中型小型の辞書が作られるわけであるが、私一個の場合、その逆のコースを進んで来たので、殊に現今わが国語界の標準規律は未だ緒につかず、新語の粗製濫造のはげしい時代には、程よき中辞典の達成は、省みるに早計であったかも知れない。

上記のごとく、本書は、当初の出発点こそ改訂版をいささか加除し修正する程度から進んだのであったが、いつ

しか本来の節度をかなり超えて、根本的修正が、ひとり文字の表記法のみにとどまらず、載録語詞、分量の上のみならず、かなり本質的にも及ぶことになってしまった。結局、実質にも、形式にも、少なからぬ進歩の跡がみとめられると信ずる。従って、頁数や組方の上にも、多大の影響を及ぼし、厚みその他装幀等色々な点にも、予想以上の多難を感ぜねばならなかった。

かくて、編集完成の時期もおくれたし、諸般の煩雑名状しがたい苦難も嘗めなければならなかった。編集部においても、辛うじてこれらの難を克服し得たのであるが、部員の手不足などを補充するために、書店の内部からも、俊敏練達の士の参加協力を得ると共に、臨時に外部からも特に明達懇篤な新進諸学人の援助をも求めることとなり、内外一和、衆力一致、他方もちろん熟練な校正員の補翼にも由り、着々、印刷の工程もなめらかにはかどり、ここに発行の機運に恵まれるに至ったのは、編者の満足これに及ぶものはない。

それら諸彦の助力を跋文中に銘記するに先だって、特に今記すべき一事は、畏友大野晋氏が、語法と基本語詞につき、更にその同窓板坂元・竹内美智子両氏の協力をも得て、応急適切な援助を寄せられたことである。

斯業行程の始終に関しては、一に岩波書店前店主故岩波茂雄氏の宏量と、現社長同雄二郎氏の寛厚に感謝すると共に、事業の進行上絶えず店内の練達者諸賢から、啓発激励を蒙ったことを肝銘する。さかのぼっては、前行「辞苑」の出版改訂時代の、博文館の上局諸氏と、忠実なる編集主任たりし溝江八男太翁と内助の一老友をも想起せざるを得ない。曾て「私の信条」として書いた如く、老至って益ゝ四恩のありがたきを感ずるのみである。

昭和三十年　一九五五年　一月一日

京都　新村出

第七版の序

此の度『広辞苑』第七版刊行の運びに至ったのは洵にめでたく、改版に御尽力くださった多くの方々の労苦に深く感謝申し上げたい。

編者、重山（ちょうざん）新村出（一八七六―一九六七）は研究生活後半部の多くを辞書編纂に捧げたが、その素志は師上田万年博士の許で兆し、松井簡治主編『大日本国語辞典』や大槻文彦『大言海』の編集室、或いはイギリスに『オックスフォード英語辞典』出版所を探訪した感動から、日本にも同書の如き大辞典をと、学士院で五十年計画を以って立案せんことを上田博士に進言したこともあった。重山は慫慂されて『大言海』第二至四巻の校訂及び校正に携わっているが、大いに啓発され又好機を与えられたと感激を以って述懐している。これに経験を得、又東西書肆の慫慂を受けて、一九三五年『辞苑』や一九三八年『言苑』を皮切りに一九六一年までに、『言林』『小言林』『国語博辞典』『新辞林』『新辞泉』『ポケット言林』『広辞苑』『新国語辞典』『（改訂版）言林』『新版言林』等、利用者の対象は異なるものの十二種の辞書が次々に出版されており、中には好評を博し二百刷を越えるものもある。取分け『辞苑』は大きく飛躍して一九五五年刊『広辞苑』となり、国民的歓迎を受けた。

しかしこの飛躍は容易なことではなかった。『辞苑』改訂のための校正ゲラは周到な遠慮で難を免れたものの、銅版や印刷用紙は工場と共に空襲で回禄に帰してしまった。戦前から改訂に携わったフランス文学者の令息新村猛氏（一九〇五―一九九二）に依れば、戦後そのゲラを基に作業は再開されたが、敗戦という大変事に際会し、言語は固より、社会制度そのものすらも大きな変革に逢着した。『広辞苑』は百科事典的性格を帯びているため、殆ど

の項目を書き改めることとなり、非常なる辛酸を嘗めることになった。『辞苑』改訂から『広辞苑』第四版に至るまで、猛氏が中心となって刻苦砕心されたが、重山にはさぞかし心強く、大きな安堵でもあったろう。

重山の辞書にはその人徳を慕って多数の学者等が勁力しており、ここに御尊名を悉く記し得ないが、黽勉された多数の功労者の名をも朽ちさせてはなるまい。

顧みれば、辞書の歴史は久しい。辞書を広く捉えれば対訳語彙集もその範疇に入るというが、とすればウル第三王朝期（紀元前二一一三―二〇〇六頃）のシュメール・アッカド語の対訳語彙集などが、その濫觴と云えよう。これは分類によって語彙を配列している。

東アジア漢字文化圏に於いては言を俟たず、中国が中心となって来た。中国語は単音節語であり、語彙の配列は、形・音・義によった。「形」とは「部首」の意で『説文解字』『玉篇』『干禄字書』等、「音」とは「韻」によるもので『切韻』『唐韻』『広韻』等、「義」とは「意味」によるもので『爾雅』『釈名』『広雅』等で、後者は後には類書に展開して膨大な『芸文類聚』『冊府元亀』『太平御覧』『韻府群玉』『佩文韻府』等々に至った。更に漢訳仏典が成立して以降は、仏典中の難解文字を巡ってその音や意味に注を加えた所謂「音義」が生じ、これは巻を逐って文字が配列されるため、前三者とは異なる方式に従う。現存最古の漢和字書『新撰字鏡』は、玄応『一切経音義』と深い関連がある。

ところで日本の辞書の権輿は逸文で伝わる『楊氏漢語抄』などで、これは漢語を和語で説明しており、漢語と和語の対訳辞書と言える。日本語は和語と中国から借用された漢語から成り立っており、日本の古辞書は一義的には、中国の文献を理解するため編まれたと言っても過言ではなかろう。日本の辞書としては、『篆隷万象名義』『新撰字鏡』『本草和名』『倭名類聚抄』『類聚名義抄』『色葉字類抄』『和歌色葉集』『伊呂波字類抄』『字鏡』『字鏡集』

『名語記』『聚分韻略』『仙源抄』『平他字類抄』『倭玉篇』『下学集』『壒嚢鈔』『節用集』『温故知新書』『運歩色葉集』『落葉集』『和句解』『日本釈名』『和漢三才図会』『物類称呼』『和訓栞』『源語梯』『雅言集覧』『俚言集覧』『嬉遊笑覧』等その他にも多く、形・音・義によって編纂されるが、義、つまり意味分類によって編纂されるものが多い。孤立語の中国語と異なる膠着語の日本語では、その構造上の差異を反映して新たな展開がある。漢字語に対する音注・義注・和語・声調等の表記以外にも、『伊呂波字類抄』『字鏡』『類聚名義抄』（改編本）には平安時代末のアクセントが付されている。『本草和名』は草名、『和歌色葉集』は和歌に関する語彙、『名語記』『和句解』『日本釈名』は語源、『物類称呼』『俚言集覧』は方言、『源語梯』は源氏物語の語彙を中心に等々、分野に特定した辞書のあるのも目立つ。また語彙の配列にイロハ順や五十音順を用いる工夫も凝らされている。最古例の『色葉字類抄』では先ずイロハ順に配列し、更にその中を意義分類している。この方式は『節用集』等に受け継がれるが、『名語記』では第二音節まで、『仙源抄』では末音節までがイロハ順による。全音節イロハ順がその後普及しなかったのは、当時語形が定まっていなかったためと云う。五十音順最古の辞書は『温故知新書』で、五十音部類を立てた後、その中を意義分類する。江戸時代末期の『和訓栞』『俚言集覧』に至ると、第二音節までを五十音順に排し、その傾向は明治に引き継がれる。また江戸時代には中国語・オランダ語・英語・フランス語・ロシア語・ドイツ語辞書も開版されており、イエズス会宣教師中心の編纂とは言え、『拉葡日対訳辞書』『落葉集』『日葡辞書』もある。世界的にもこれほど古くから、かくも多種多様な辞書を伝存する国は多くはなかろう。

因みに日本語と同じ言語構造を持つ隣国朝鮮は、中国に倣った韻書・字書や外国語習得のための対訳辞書類は多いが、朝鮮語自体の辞書は極めて乏しい。

『広辞苑』序文に於いて重山は、先行する『大日本国語辞典』や『大言海』を参考にした旨を述べているが、その『大言海』の編者大槻文彦は『言海』序文に於いて、『新撰字鏡』『倭名類聚抄』『類聚名義抄』以下『物類称呼』

『和訓栞』に至る今昔の諸辞書を挙げ、不備に言及しつつも先哲の恩沢に感謝しておられる。その古辞書には中国の『爾雅』『説文解字』『玉篇』『文選』『切韻』『一切経音義』等が用いられているので、詮ずる所仄かにせよ『広辞苑』も古代中国の影響下にあると言える。中国古代の文字文化が脈々と底流となって今日に及んでいることに思い至る時、文化伝統の深さと重さに今更ながら驚かされる。

重山は京都帝国大学文科大学言語学科初代教授で、言語学・国語学者であるが、その研究対象は言語に限らず人文学一般に亘り、人文学の礎を成す文献学にも造詣が深かった。その研究分野は宏大であるが、日本語の歴史研究・キリシタン資料研究・語誌語源研究に収斂される。重山の著書・論文の中で語誌語源研究はかなりの比重を占めるが、終生関心を持ち続けたのは、やはりその分野であった。重山はドイツ留学から帰朝間もない上田万年博士の「言語学者としての新井白石」なる講演を聴き、言語学に志した。重山の景仰する白石の『東雅』は日本語の語源に触れること多く、また重山がドイツのベルリン大学に留学した当時、彼地では印欧比較言語学が甚だ盛んであった。比較言語学は祖語の再構成を基に成立しており、祖語探求はとりもなおさず語誌語源研究である。重山はその晩年『広辞苑』の語源の方面に力を致した。

重山は上述の如く多くの辞書を編纂したが、その内現在もなお改訂を重ね、社会に推重されているのは、本書『広辞苑』である。重山を顕彰し、言語学・国語学の発展に微力ながらも寄与する新村出記念財団は、同書の印税によって維持されている。言語学・国語学の分野で優れた学者は多いが、生時のみならず歿後にも後世を利する学者は稀であろう。また重山は和・漢・洋に通じ、歌人としても著名で、その細やかなる感性から紡ぎだされる文章は精緻でありながらも流麗で雅趣を湛え、まさに文人と称しても過言ではなかろう。その言語学及び国語学への寄与、諸辞書を通じての国民生活への功績等によって、一九五六年には文化勲章が授与されている。

歴史的に見れば、辞書の編纂は基本的には個人の強靱な意志の下に、或いは数人の下働きに支えられてきた。それは明治まで続き、大槻文彦『言海』の「ことばのうみのおくがき」に記された、亡児・喪妻を巡る肺腑を抉る慟哭は、読書子の涙を絞った。『大日本国語辞典』の主編者松井簡治博士は、辞書編纂のため個人的に膨大な書籍群を蒐集した。それは今も静嘉堂文庫に松井文庫として保存されている。山田美妙『日本大辞書』、落合直文『ことばの泉』等も同様であった。『広辞苑』の場合は、岩波茂雄氏の理解の下、一九四八年九月に岩波書店に編集室が設けられ、新村猛氏を中心とする編集チームと合同で作業が行われた。校閲・執筆協力者や岩波書店歴代の編集陣によって、改版毎に進展と改善を重ねて来た。

今般『広辞苑』第七版の上梓に至ったが、これは偏に利用者各位の揺るぎ無き御愛顧の賜物と感謝に堪えない。屢々『広辞苑』に拠ればと云う引用を目睹するのも、その証であろう。

『広辞苑』のデジタル化は既に一九八七年に始まり、電子辞書への搭載は固より、今日ではスマートフォンのアプリとしても広く利用されている。筆者の如き書籍愛好世代にとっては、花畑に蜜を探る喜悦の喪われた、一種寂寥感があるが、幅広い世代が『広辞苑』を手軽に利用できるようになったのは喜ばしい限りである。

『広辞苑』は海外でも、広範囲に亘る語彙の周到なる選択、語義や語法説明の精緻さ、また百科事典性などで高い評価を受けているのは有難いことである。中国では上海外語教育出版社から第五版及び第六版が二〇〇五年と二〇一二年に影印出版、また韓国では語文学社から第六版の翻訳版が二〇一二年に刊行されている。

一九八一年新村出記念財団発足後は財団から編集者を出しているが、第七版では木田章義氏に孜々御尽力いただき、就中、重要な古語の見直しと用例点検ならびに追加する古語の選定には御辛苦をおかけした。第三至六版の永

きに亘って御尽瘁下さった山口明穂氏、これら御二方に深甚なる謝意を呈したい。そして多数の校閲・執筆者諸彦、岩波書店辞典編集部の諸氏、更にその他多くの御協力者にも衷心より御礼を申し述べる。

第七版では、語彙には全般に亘って検討を加え、現代語では目まぐるしい言語変化に対応し、古典語では用例・出典等を改めて点検した。また百科項目では全面的見直しと、現在に相応しい新項目の追加を行ったため、全体で一万項目が増加した。今後も学術的核心は堅持しながらも、学問の進歩、社会の趨勢、御利用者のご意見等も取り入れながら、更なる向上を図ってゆきたい。御利用者諸賢の相渝らぬ御愛顧を念願して已みません。

二〇一七年一二月

新村出記念財団　代表理事
藤　本　幸　夫

凡　例

編集方針

一、この辞典は、国語辞典であるとともに、学術専門語ならびに百科万般にわたる事項・用語を含む中辞典として編修したものである。ことばの定義を簡明に与えることを主眼としたが、語源・語誌の解説にも留意した。

二、国語項目は、現代語はもとより、古代・中世・近世にわたって日本の古典にあらわれる古語を広く収集し、その重要なものを網羅した。漢語・外来語のほか、民俗語・方言・隠語・慣用句・俚諺の類についても、その採録に意を用いた。

三、日本語のうち最も基礎的と思われる語約一千を選んで、その語義・用法などを特に詳述した。

四、国語項目の解説に当たっては、つとめて古典から文例を引用し、また、現代語の作例を多く掲げ、語の用法を実地に示した。また、仮名遣いや発音を定めるに当たっては、古辞書・訓点本の類に照らして正確を期した。

五、語源・語誌は、編者の説を中心にして諸家の説をも比べて参考とし、要約して注記した。必要に応じて、漢語にはその出典を、外国語の訳語にはその原語を掲示した。

六、百科的事項の収載範囲は、哲学・宗教、歴史・地理、政治・法律・経済、教育、数学・自然科学・医学、産業・技術・交通、美術・芸能・体育・娯楽、語学・文学などの万般にわたり、地名・人名・書名・曲名・年号などの固有名詞にも及ぶ。日本の人名は物故者に限った。

七、挿図は、服飾・調度・紋様・風俗・動物・植物・建築その他各方面にわたり、地図・模式図を含め約二千八百図を収めた。また、系図・組織図・一覧表など約百表を掲げ、解説文の理解を助けるよう配慮した。

八、付録（別冊）として、『漢字小字典』『アルファベット略語一覧』を作成し、また、日本語の文法、漢字、外来語、文章の書き方などに関する資料類を収めた。

九、収載項目は、本冊および付録『漢字小字典』『アルファベット略語一覧』をあわせて約二十五万である。

見出し語

仮名遣い

1　原則として『現代仮名遣い』（一九八六年七月 内閣告示）の方式に従って太字（アンチック体）で表記した。

2　和語・漢語には平仮名を、外来語には片仮名を用いた。

こおり（リコホ）【氷】　**せん・せい**【先生】
ま・ぢか【間近】　**しゅく・じ**【祝辞】
つづ・く【続く】　**クラブ**【club・倶楽部】
こんにち・は【今日は】　**アラスカ**【Alaska】

3　歴史的仮名遣いが現代仮名遣いと相違するものは、その相違する部分を見出し語の下に片仮名で小さく記し、相違しない部分は「・・」で略した。

あおい（アフヒ）【葵】　**がっ・こう**（ガクカウ）【学校】
おうさか（アフ：）【逢坂】　**おおさか**（オホ：）【大阪・大坂】
とお・か（トヲ：）【十日】　**もよお・す**（モヨホス）【催す】
いれ・ぢえ（ヱ：）【入れ知恵】　**うわ・ぢょうし**（ウハヂウ：）【上調子】

4　外来語の片仮名表記については『外来語の表記』（一九九一年六月 内閣告示）を参考とした。中国の地名・人名は一般に漢字音によったが、現代地名・人名は、原語音のローマ字表記を解説の冒頭に記し

た場合がある。また、韓国・朝鮮の現代地名・人名は朝鮮語音を見出しとし、漢字表記を示した上、適宜原語音のローマ字表記を記した。

※長音を表すには「ー」を用いた。

※片仮名表記する外国の固有名詞、および、外国語の感じが多分に残っている語に限って［ｖ］の音は「ヴ」の仮名で表した。

見出し語の区切り

1　語構成を示すため、語源上からこれを二つの基本部分に分け、「・」でつないだ。外来語の複合語は、原則として原語の区切りによったが、日本語としての複合意識に従って区切りを入れた場合もある。

あ・がき【足掻き】　**ふ・かのう**【不可能】
グッド・バイ【good-by; good-bye】
ガン・マン【gunman】

語によっては、三つ以上に区分したものもある。

う・の・はな【卯の花】　**しか・のみ・なら・ず**【加之】
アイ・エル・オー【ＩＬＯ】

語源を確定しがたい場合、また、語形の変化によって区分しがたい場合は、「・」を付さなかった。

やなぎ【柳・楊・楊柳】（ヤノキ（矢篦木）の転か。また、…
やよい（ヤヨヒ）【弥生】（イヤオヒの転）
ちょうな（テウナ）【手斧】（テヲノがテウノと転じ、さらに訛ったもの）
ピンナップ【pinup（アメリカ）】

2　人名は姓氏と名との間で区切り、地名は「山」「川」「橋」などが付く場合、その直前で区切ったが、その他の地名・作品名・年号などの固有名詞は原則として区切らなかった。

にしとうきょう（ニキヤウ）【西東京】

かなでほんちゅうしんぐら【仮名手本忠臣蔵】

3　活用する語は、原則としてその終止形を見出し語とし、語幹と語尾との間に「・」を付した。その位置が語構成を示す「・」と合致する時は、「・」のみを付した。

さが・る【下がる】《自五》　**さ・げる**【下げる】《他下一》
うれ・し【嬉し】《形シク》　**うれし・い**【嬉しい】《形》
たち・あが・る【立ち上がる】《自五》
かえり・みる（カヘリミル）【顧みる】《他上一》　**め・く**《接尾》

表記形

1　【　】の中に、見出し語の仮名に相当する漢字または外国語の綴りを示した。

（漢語・和語）

2　相当する漢字がいくつかある場合は、現代標準的と思われるものをもって代表させた。この際、『同音の漢字による書きかえ』（一九五六年七月 国語審議会報告）などを参照した。

※「弘報」（コウホウ）と「広報」（クワウホウ）、「聚落」（シュウラク）と「集落」（シフラク）とのように、字音仮名遣いが異なるものは、別項として扱った。

3　送り仮名は、現代語は現代仮名遣い、古語は歴史的仮名遣いに従って施した。『送り仮名の付け方』（一九八一年一〇月 内閣告示）に示された原則に準拠しつつ、旧来の慣行をも考慮して送った。

あた・る【当たる】　**あ・てる**【当てる】
おも・う（オモフ）【思う】　**おもい**（オモヒ）【思い】
おもい・わた・る（オモヒ：）【思ひ渡る】
ほとんど【殆ど】　**き・に・いり**【気に入り】

（外来語）

4　外来語については、日本に直接伝来したと考えられる原語を掲

げ、その言語名を注記した。英語の場合は一般にその注記を省略したが、他言語の原語と併記する場合は注記を施した。また、ギリシア語・ロシア語・アラビア語などはローマ字綴りに直した。漢字を当てる慣行の定着している語にはこれを並記した。

ビードロ【vidro ガルポルト】　**ガラス**【glas ンダオラ・硝子】
シャポー【chapeau ンスフラ】　**テーマ**【Thema ッドイ】
イクラ【ikra アロシ】　**イスラム**【Islām アビアラ】
デスク【desk】　**レンズ**【lens ンダオラ・リスイギ】
エチケット【etiquette リスイギ・étiquette ンスフラ】

中国語および漢字の当たる梵語・朝鮮語などの場合は、【　】内にその漢字を掲げ、適宜、原語音をローマ字で注記した。

マージャン【麻雀】(中国語)
チョンガー【総角】(朝鮮語 ch'onggak の転)

5　外国語の固有名詞には原則として言語名を注記せず、解説の叙述で分かるようにした。ただし、いずれの言語名か定めがたい人名・地名では注記を施した。人名の場合は姓だけでなく名をも示し、また、原語における冠詞の類は多く省略した。

セーヌ【Seine】フランス北部、パリ盆地を流れる川。
ハーグ【Den Haag】オランダ西部の都市。
ペキン【北京】(Beijing; Peking) 中華人民共和国の首都。
カント【Immanuel Kant】ドイツの哲学者。
ペトロ【Petros シギリア】キリスト十二使徒の筆頭。

6　原語音からいちじるしく転訛した外来語、または外国語に擬して日本で作られた語には、その綴りを【　】内に入れず、(　)内に注記した。

シュー・クリーム (chou à la crème ンスフラ)
ハヤシ・ライス (hashed meat and rice)
エキス【越幾斯】(extract ンダオラ の略)
ミシン (sewing machine の略訛)
ナイター (和製語 nighter)
ゴー・サイン (和製語 go sign)

7　片仮名で表記した外来語と平仮名で表記した和語・漢語との複合した語は、その片仮名に相当する部分を「ー」で示し、必要に応じてその複合語に相当する外国語を注記した。

アメリカ・まつ【ー松】
かいきん・シャツ【開襟ー】
エーゲ・かい【ー海】(Aegean Sea)
サリチル・さん【ー酸】(salicylic acid)
ひがし・インド・がいしゃ【東ー会社】(East India Company)

8　【　】内の外国語を以下の記述で繰り返す時は、その綴りを省略して「～」で表した。

オーバー【over】…　**ー・コート**【～coat】…　**ー・タイム**【～time】…　**ー・ドクター**(和製語 ～doctor)…
ヴィクトリア【Victoria】①(～Falls) アフリカ南部、ザンビアとジンバブエの…　②(Lake ～) アフリカ東部、タンザニア・ケニア・ウガンダにまたがる…

品詞の表示

1　品詞の別は、付録『日本文法概説』の所説に従い、略語をもって『　』内に示した。(『略語表』参照)

2　名詞および連語には、原則として品詞の表示を省略した。

3　動詞には自動詞・他動詞の別ならびに活用の種類を、文語形容詞には活用の種類を示した。活用の種類に関する詳細は、付録の動詞・助動詞および形容詞の『活用表』を参照されたい。

※動詞の四段活用・五段活用については、文語としての用法しか認められない語に限って、四段活用とした。

文語形と口語形

1　活用語は、口語形見出しの下に、文語の用法をも併せて解説した。文語形のみあって、口語形が普通には行われない語については、その限りでない。

2　口語形項目には、解説の冒頭に、対応する文語形を 文 として示した。ただし、文語・口語同形の場合は省いた。

し・いるル【強いる】《他上一》文 し・ふ（上二）

しょう・する【称する】《他サ変》文 称す（サ変）

3　文語形・口語形の見出しが排列上相並ぶ場合は、文語形見出しを立てなかった。

見出し語の排列

五十音順

1　上から一字ずつ読んだ現代仮名遣いの五十音順によって排列した。

2　清音・濁音・半濁音の順に置いた。

し-さい【詩才】　**へん-き**【騙欺】
し-ざい【死罪】　**べん-き**【便器】
じ-さいヂ【持斎】　**べん-ぎ**【便宜】
じ-ざい【自在】　**ペンキ**【番瀝青】

3　促音オン・拗音ヨウオンは、直音の前に置いた。

さっ-き【撮記】　**ひょうヘウ**【瓢】
さ-つき【五月】　**ひ-よう**【日傭】
ざっ-き【雑器】　**びょうベウ**【可う】
ざ-つき【座付】　**び-よう**【美容】

4　長音符「**ー**」は、すぐ上の片仮名の母音（ア・イ・ウ・エ・オのいずれか）を繰り返すものと見なして、その位置に排列した。

コーヒーはコオヒイ、**セーター**はセエタア、**ウール**はウウルの位置に置く。

同音の語の排列

1　見出し語の仮名表記が全く同じである場合は、順次つぎの基準に従って排列した。

2　品詞の順――名詞、代名詞、動詞、形容詞、連体詞、枕詞まくらことば、副詞、助動詞、助詞、接続詞、接頭辞、接尾辞、感動詞の順に排列した。

連語は、体言相当のものは体言の、用言相当のものは用言の後に置いた。

そ-う【疎雨】
そ-うフソ【沿う】㊀《自五》…　㊁《他下二》
そうウサ【然う】（サ（然）の転）㊀《副》…　㊁《感》
そうウサ【候】《助動》
そうウサ《接尾》

3　和語・漢語・外来語の順――品詞を同じくする場合は、一般に和語を前に、字音語を後に置いた。外来語は、その原語の品詞にかかわりなく、名詞の末尾に排列した。

同音の語は、漢字表記のある場合は、【　】内の首字の字画数の少ない順、首字が同じ場合は二字目以下の漢字の字画数の少ない順、字画数が同じ場合は『康熙字典』の部首順に並べた。同音の外来語は、原語のアルファベット順に並べた。

こいコヒ【恋】　**めす**【雌・牝】
こいコヒ【鯉】　**メス**【mesオランダ】
こ-い【古意】　**め-す**【召す】《他五》
こ-い【故意】

かい・かん(イクワ)【快感】　**コード**【chord】
かい・かん(イクワ)【快漢】　**コード**【code】
かい・かん(クワイクワン)【挂冠】　**コード**【cord】
かい・かん(ワン)【海関】

4　普通名詞・固有名詞の順――地名・人名・作品名・年号など固有の名称は、原則として同音同字の他の名詞と項目を併せず、別に見出しを立ててその次に並べた。これら二つの項目が排列順位の上で離れる場合には、普通名詞の項目の解説末尾に（地名別項）（書名別項）などと注記した。また、外来語と同音の外国の固有名詞がある場合は、普通名詞の後に排列した。

タイ【tie】　**フォー**【pho(ベトナム)】
タイ【Thai・泰】　**フォー**【Dario Fo】

親項目と追込項目

1　複合語は、語構成上の最初の部分が見出し語として掲げてある場合には、それを親項目としてその下にまとめ、追込項目とした。ただし、一語意識のつよい語は独立項目とした。

2　追込項目の見出し表記は、その親項目に相当する部分を繰り返さず、「**ー**」で示した。

3　親項目は、見出し語の仮名が三字以上（促音・拗音などを表す仮名も字数に算入）から成る語に限った。ただし、漢字一字の字音語は親項目としない。

やっこ【奴】…　**ー・あたま**【奴頭】…　**ー・ことば**【奴詞】…
ー・だこ【奴凧】…　**ー・どうふ**【奴豆腐】…
しょ・き【暑気】…　**ー・あたり**【暑気中り】…　**ー・ばらい**(バラ)【暑気払い】…

※「有為(うい)」に「有為転変」を、また、「食(しょく)」に「食あたり」「食中毒」などを追い込まない。

※日本の姓氏の項目に限り、二字以下の場合も親項目とした。ただし、この場合は人名以外の普通名詞は追い込まない。（次項参照）

おだ【織田】…　**ー・うらくさい**【織田有楽斎】…　**ー・のぶなが**【織田信長】…

4　固有名詞を冠した複合語は、それが普通名詞であっても、その固有名詞を親項目として追い込んだ。人名の場合は、姓氏を親項目としてまとめた。

おうみ(アフミ)【近江】…旧国名。…　**ー・あきんど**【近江商人】…
ー・おんな(ナヲン)【近江女】…　**ー・じんぐう**【近江神宮】…
ー・せいじん【近江聖人】…　**ー・りょう**(リヤウ)【近江令】…
ごとう【後藤】姓氏の一つ。…　**ー・しざん**【後藤芝山】…
ー・てん【後藤点】…　**ー・ぼり**【後藤彫】…　**ー・またべえ**(エ)【後藤又兵衛】…　**ー・ゆうじょう**(イウ)【後藤祐乗】…

※見出し語の仮名が日本の姓氏を除く二字以下の固有名詞、例えば地名の「滋賀(しが)」には、「滋賀浦(しがのうら)」「滋賀山(しがやま)」などは追い込まない。

慣用句

1　その最初の一単語を見出しとする項目の次に、行を改めて太字（ゴシック体）で掲げた。

2　見出しは、漢字・仮名まじり、現代仮名遣いで表記し、その五十音順に並べた。

3　最初の一単語は「**ー**」で示した。ただし、その部分が活用語の場合、特定の漢字表記を示す場合、また、追込項目として掲げた語を最初の一語とする場合には「**ー**」を用いなかった。

ー筆を選ばず（「弘法」の慣用句）
持ちつ持たれつ（「持つ」の慣用句）

夫婦喧嘩は犬も食わぬ（「夫婦」の慣用句）

解　説

本文の表記

1　説明の本文は現代仮名遣いに従って表記した。動植物名・外来語、また、発音や語形を示す場合は、適宜に片仮名を用いた。

2　漢字の字体は、常用漢字ならびに人名用漢字はいわゆる新字体を、他は広く通用している字体を採用した。

語釈の区分

1　語義がいくつかに分かれる場合には、原則として語源に近いものから列記した。

2　区分を明らかにするため、①②③…の番号を付した。さらに大きく分類する場合は❶❷❸…の番号を、細かく区分する場合は㋐㋑㋒…の符号を用いた。

3　一つの項目を二つ以上の品詞あるいは活用の種類に分けて解説する時は、それぞれの品詞・活用表示の前に㊀㊁㊂…の番号を付した。

4　説明文中でこれらの語義区分を参照する場合は、①②③…は1 2 3…とし、他については小字で示した。

術語の分類

専門学術用語には、その分野を明らかにするため、必要に応じて、解説の冒頭に〔　〕でかこんでその語の分類略語を標示した。（『略語表』参照）

ぜん・い【善意】①善良な心。②他人のためを思う心。…

③〔法〕ある事実を知らないこと。↔悪意

漢語の出典

漢語または諺（ことわざ）の類には、必要と認めた場合、漢籍の出典を［　］でかこんで解説の冒頭に掲げた。原典名の下に小字で篇・章名を付した。

ふ・わく【不惑】…　②［論語為政「四十而不惑」］年齢四〇歳をいう。

漢字の使い分け

【　】内に二つ以上の漢字表記があって、語義によって使い方が異なる場合は、語義区分の直後に≪　≫でかこんで、該当する漢字を掲げた。また、項目末尾に◇を付して、現代よく使う漢字の使い分けを説明した場合がある。

季　語

基本的な季語約四千を選び、解説末尾に〈季春〉のように、新年・春・夏・秋・冬の季節を示した。

用　例

1　語義の理解を助けるため、つとめて用例を掲げた。

2　古典からの引用に当たっては書名を、明治期以降の文献からの引用に当たっては作者・書名、または掲載紙誌等を掲げた。

3　引用に当たっては読みやすさを考慮し、原典の仮名を漢字に、または漢字を仮名に、あるいは片仮名を平仮名に改め、漢文を読み下しにするなど、かならずしも原文のままではない。

ただ・びと【徒人・直人】①…推古紀「其れ一に非じ」。…

なみ・する【無みする・蔑する】《他サ変》㊇なみ・す（サ変）…

古文孝経延慶点「法を無（ナミ）スル」。…

4　用例中、語句の一部を省略した場合は、「…」で示した。また、難

解の語句には、（　）でかこんで注釈を施した。

ついえ（ツヒエ）**【費え・弊え・潰え】**…　②つかれ苦しむこと。弱ること。太平記三七「あはれ一に乗る（弱点につけこむ）処やと思ひければ」…

5　引用古典の書名は多く略称を用い、巻名・章段名などは小字で付記した。また、明治期以降の文献の作者名には略称で示したものがある。（『出典略称一覧』参照）

6　見出し語に相当する部分は「一」で略した。活用語の場合は、語幹を「一」で表し、「・」をつけて活用語尾を送った。ただし、語幹と語尾とを分けにくい場合は「一・」を用いなかった。また「一」を用いず、用例中の特殊な表記を残したものもある。

さびし・い【寂しい・淋しい】《形》図さび・し（シク）…　②…源若菜下「…かたはら一・しき慰めにもなつけむ」。「口が一・い」…

いる【射る】《他上一》…　①…万二「ますらをのさつ矢たばさみ立ち向かひ射る的形（まと）は見るにさやけし」…

れる《助動》（活用は下一段型…）①自発を表す。…「吉報が待たれる」…

あか・ゲット【赤一】…　①赤い毛布。鉄腸、雪中梅「一枚の赤洋氈（あかケット）を四つ折りにして敷物となしたるは」…

典　拠

1　仮名遣いや清濁その他発音などに関して、古辞書・訓点本の類を典拠として掲げる場合は、原文のまま引用した。「日葡辞書」「和英語林集成」（略称「ヘボン」）のローマ字書きは片仮名にうつした。原文を引く必要のない時は〈　〉にかこんで単に書名のみを示した。

つ・ぶ【禿ぶ】《自上二》…すり切れる。ちびる。名義抄「弊、ツビタリ」

あまつさえ（アマツサヘ）**【剰え】**《副》（アマリサエの音便アマッサエの転）…そればかりか。…日葡「アマッサエ」。…

なめ・さか【滑坂】なめらかな坂。〈新撰字鏡六〉

2　類書その他に説くところに依拠して解説を施した場合には、解説末尾に、（　）でかこんでその書名を注記した。

うんたろう（ウンタラウ）**【うん太郎】**うっかり者。（俚言集覧）

その他

1　（　）内に二行書きで示した西暦紀年は、人名の場合は生没年、年号の場合はその行われた期間、その他、在位・在職期間などを表す。原則として、一八七二年（明治五）以前の西暦と和暦（旧暦）との月・日のずれは無視し、付録『西暦・和暦対照表』によって西暦紀年を記した。

2　国・都道府県・都市の人口は、必要と思われるものにのみ記した。日本に関するものは、総務省統計局『平成二七年国勢調査人口等基本集計結果統計表』を基本にした数字である。外国に関するものは、主に国際連合編 *Demographic Yearbook* 二〇一五年版により、調査年次を（　）内に注記した。また、中国については『中華人民共和国全国分県市人口統計資料』二〇一二年版によった。これら以外の資料を参照したものも若干ある。

3　外国の作品名や学術語の日本語訳には、その原語を（　）でかこんで解説の冒頭に掲げた。

4　ノーベル賞受賞者、文化勲章受章者については、解説末尾に「ノーベル賞」「文化勲章」と記した。

5　区切り記号

①　一般に句点（。）・読点（、）を用いた。

②　中黒（・）は、同格の語句を並列するのに用いた。また小数点に用いた。

…フランス・中国・日本…　…保守的・権威主義的傾向…

てつ【鉄】…原子量五五・八五。…

③ ハイフン（-）は、外来語などで複合語の連結を示すのに用いた。

…グリーン-ベルト…　…石井-ランシング協定…

…糸魚川-静岡構造線…　…二-二六事件…

④ 二重ハイフン（=）は、片仮名で表記された外国人名の区切りに用いた。

…レオナルド=ダ=ヴィンチ…　…ホー=チ=ミン…

⑤ セミコロン（；）は、ローマ字綴りの並列に用いた。

…(metre; meter)…

6　参照記号

⇩　解説はその項目を見よ

↓　その項目を参照せよ

↕　対語・反義語

7　解説末尾に▽を付して、現代語の用法についての注記をした場合がある。

出典略称一覧

▽本文解説中に引用した文献のうち、略称を用いた書名・作者名を略称の五十音順に排列して掲げた。

▽ジャンル名の略称も併せて記し、浄、伎、…のように略称の後に読点を付した。

▽仮名草子・浮世草子・洒落本・滑稽本・黄表紙・人情本のうち、見出し項目にある作品については、ジャンル名(仮、浮、洒、など)を省いて掲げた。俳諧についても、本文中で適宜ジャンル名(俳)を省いた。

▽本文中に引用した勅撰和歌集・準勅撰和歌集の部立は次のように略し、小字で掲げた。

離別・別離→別　羈旅→旅　賀歌・慶賀→賀

▽「日本書紀」は神代紀上・神武紀などのように、また、「延喜式」は民部省式・神名式などのように、それぞれ巻名を掲げ、書名は省いた。

▽本文中に引用した「枕草子」の章段を示す数字は岩波書店版「新日本古典文学大系」本によった。

古典作品

(略称)	(正称または通称)	(正称または通称の読み)
あ		
天草本伊曽保	天草本伊曽保物語	あまくさぼんいそほものがたり
天草本平家	天草本平家物語	あまくさぼんへいけものがたり
い		
十六夜	十六夜日記	いざよいにっき
伊勢	伊勢物語	いせものがたり
一代男	好色一代男	こうしょくいちだいおとこ
一代女	好色一代女	こうしょくいちだいおんな
石清水	石清水物語	いわしみずものがたり
う		
浮、	浮世草子	うきよぞうし
三代男	好色三代男	こうしょくさんだいおとこ
新永代蔵	日本新永代蔵	にっぽんしんえいたいぐら
右京大夫集	建礼門院右京大夫集	けんれいもんいんのうきょうのだいぶしゅう
雨月	雨月物語	うげつものがたり
宇治拾遺	宇治拾遺物語	うじしゅういものがたり
宇津保	宇津保物語	うつほものがたり
運歩色葉	運歩色葉集	うんぽいろはしゅう
え		
栄華	栄華物語	えいがものがたり
永代蔵	日本永代蔵	にっぽんえいたいぐら
延慶本平家	平家物語(延慶本)	へいけものがたり(えんきょうぼん)
お		
桜陰比事	本朝桜陰比事	ほんちょうおういんひじ
落窪	落窪物語	おちくぼものがたり
折たく柴	折たく柴の記	おりたくしばのき
織留	西鶴織留	さいかくおりどめ
か		
仮、	仮名草子	かなぞうし
伊曽保	伊曽保物語	いそほものがたり
蜻蛉	蜻蛉日記	かげろうにっき
き		
記	古事記	こじき
伎、	歌舞伎	かぶき
青砥稿	青砥稿花紅彩画	あおとぞうしはなのにしきえ
吾嬬鑑	傾情吾嬬鑑	けいせいあずまかがみ
上野初花	天衣紛上野初花	くもにまごううえののはつはな
浮名横櫛	与話情浮名横櫛	よわなさけうきなのよこぐし

韓人漢文	韓人漢文手管始	かんじんかんもんてくだのはじまり
勧善懲悪	勧善懲悪覗機関	かんぜんちょうあくのぞきがらくり
小袖曽我	小袖曽我薊色縫	こそでそがあざみのいろぬい
三人吉三	三人吉三廓初買	さんにんきちさくるわのはつがい
島衛	島衛月白浪	しまちどりつきのしらなみ
助六	助六所縁江戸桜	すけろくゆかりのえどざくら
雷伝記	源平雷伝記	げんぺいなるかみでんき
仏の原	けいせい仏の原	けいせいほとけのはら
壬生大念仏	傾城壬生大念仏	けいせいみぶだいねんぶつ
名歌徳	名歌徳三升玉垣	めいかのとくみますのたまがき
四谷怪談	東海道四谷怪談	とうかいどうよつやかいだん
黄、	黄表紙	きびょうし
狂、	狂言	きょうげん
玉葉集	玉葉和歌集	ぎょくようわかしゅう
金槐集	金槐和歌集	きんかいわかしゅう
金刀本平治	平治物語(金刀比羅本)	へいじものがたり(ことひらぼん)
金刀本保元	保元物語(金刀比羅本)	ほうげんものがたり(ことひらぼん)
金葉	金葉和歌集	きんようわかしゅう
け 月清集	秋篠月清集	あきしのげっせいしゅう
源	源氏物語	げんじものがたり
こ 後紀	日本後紀	にほんこうき
広本拾玉	拾玉集(広本)	しゅうぎょくしゅう(こうほん)
幸若、	幸若舞曲	こうわかぶきょく
古今	古今和歌集	こきんわかしゅう
古今六帖	古今和歌六帖	こきんわかろくじょう
後拾遺	後拾遺和歌集	ごしゅういわかしゅう
後撰	後撰和歌集	ごせんわかしゅう
滑、	滑稽本	こっけいぼん
七偏人	妙竹林話七偏人	みょうちくりんわしちへんじん
五人女	好色五人女	こうしょくごにんおんな
古本説話	古本説話集	こほんせつわしゅう
今昔	今昔物語集	こんじゃくものがたりしゅう
さ 狭衣	狭衣物語	さごろもものがたり
更級	更級日記	さらしなにっき
三蔵法師伝	大唐大慈恩寺三蔵法師伝	だいとうだいじおんじさんぞうほうしでん
散木	散木奇歌集	さんぼくきかしゅう
し 詞花	詞花和歌集	しかわかしゅう
十巻本和名抄	倭名類聚鈔(十巻本)	わみょうるいじゅしょう(じっかんぼん)
洒、	洒落本	しゃれぼん
釈紀	釈日本紀	しゃくにほんぎ
拾遺	拾遺和歌集	しゅういわかしゅう
拾玉	拾玉集	しゅうぎょくしゅう
浄、	浄瑠璃	じょうるり
朝顔話	生写朝顔話	しょううつしあさがおばなし
油地獄	女殺油地獄	おんなころしあぶらのじごく
生玉	生玉心中	いくたましんじゅう
井筒業平	井筒業平河内通	いづつなりひらかわちがよい

出典略称一覧

今宮	今宮の心中	いまみやのしんじゅう
妹背山	妹背山婦女庭訓	いもせやまおんなていきん
歌軍法	持統天皇歌軍法	じとうてんのううたぐんぽう
歌念仏	五十年忌歌念仏	ごじゅうねんきうたねぶつ
卯月紅葉	ひぢりめん卯月紅葉	ひぢりめんうづきのもみじ
浦島	浦島年代記	うらしまねんだいき
烏帽子折	源氏烏帽子折	げんじえぼしおり
扇八景	曽我扇八景	そがおうぎはっけい
近江源氏	近江源氏先陣館	おうみげんじせんじんやかた
大磯虎	大磯虎稚物語	おおいそのとらおさなものがたり
大塔宮	大塔宮曦鎧	おおとうのみやあさひのよろい
大原問答	大原問答青葉笛	おおはらもんどうあおばのふえ
女楠	吉野都女楠	よしののみやこおんなくすのき
女腹切	長町女腹切	ながまちおんなはらきり
女舞衣	艶容女舞衣	はですがたおんなまいぎぬ
会稽山	曽我会稽山	そがかいけいざん
蛙合戦	傾城島原蛙合戦	けいせいしまばらかえるがっせん
賀古教信	賀古教信七墓廻	かこのきょうしんななはかめぐり
重井筒	心中重井筒	しんじゅうかさねいづつ
苅萱桑門	苅萱桑門筑紫轢	かるかやどうしんつくしのいえづと
川中島合戦	信州川中島合戦	しんしゅうかわなかじまかっせん
河原達引	近頃河原達引	ちかごろかわらのたてひきぎいちほうげんさんりゃくのまき
鬼一法眼	鬼一法眼三略巻	
兼好法師	兼好法師物見車	けんこうほうしものみぐるま
氷朔日	心中刃は氷の朔日	しんじゅうやいばはこおりのついたち
国性爺	国性爺合戦	こくせんやかっせん
国性爺後日	国性爺後日合戦	こくせんやごにちかっせん
最明寺殿	最明寺殿百人上臈	さいみょうじどのひゃくにんじょうろう
釈迦如来	釈迦如来誕生会	しゃかにょらいたんじょうえ
酒呑童子	傾城酒呑童子	けいせいしゅてんどうじ
聖徳太子	聖徳太子絵伝記	しょうとくたいしえでんき
職人鑑	用明天王職人鑑	ようめいてんのうしょくにんかがみ
末松山	椀久末松山	わんきゅうすえのまつやま
隅田川	双生隅田川	ふたごすみだがわ
先代萩	伽羅先代萩	めいぼくせんだいはぎ
千本桜	義経千本桜	よしつねせんぼんざくら
曽根崎	曽根崎心中	そねざきしんじゅう
大経師	大経師昔暦	だいきょうじむかしごよみ
丹波与作	丹波与作待夜の小室節	たんばよさくまつよのこむろぶし
忠臣蔵	仮名手本忠臣蔵	かなでほんちゅうしんぐら
手習鑑	菅原伝授手習鑑	すがわらでんじゅてならいかがみ

天網島	心中天の網島	しんじゅうてんのあみじま	淀鯉	淀鯉出世滝徳
道中双六	伊賀越道中双六	いがごえどうちゅうすごろく	冷泉節	源氏冷泉節
虎が磨	曽我虎が磨	そがとらがいしうす	盛衰記	よどごいしゅっせのたきのぼり
二枚絵草紙	心中二枚絵草紙	しんじゅうにまいえぞうし	続後紀	げんぺいじょうすいき
女護島	平家女護島	へいけにょごのしま	続古今	しょくにほんこうき
寿門松	山崎与次兵衛寿の門松	やまざきよじべえねびきのかどまつ	続後拾遺	しょくこきんわかしゅう
博多小女郎	博多小女郎波枕	はかたこじょろうなみまくら	続後撰	しょくごしゅういわかしゅう
反魂香	傾城反魂香	けいせいはんごんこう	続詞花	しょくごせんわかしゅう
彦山権現	彦山権現誓助剣	ひこさんごんげんちかいのすけだち	続拾遺	しょくしかわかしゅう
双蝶蝶	双蝶蝶曲輪日記	ふたつちょうちょうくるわにっき	続千載	しょくしゅういわかしゅう
二つ腹帯	心中二つ腹帯	しんじゅうふたつはらおび	続門葉	しょくせんざいわかしゅう
松風村雨	松風村雨束帯鑑	まつかぜむらさめそくたいかがみ	書言字考	しょくもんようわかしゅう
万年草	心中万年草	しんじゅうまんねんそう	諸国ばなし	しょげんじこうせつようしゅう
女夫池	津国女夫池	つのくにみょうといけ	続紀	さいかくしょこくばなし
艶狩	艶狩剣本地	もみじがりつるぎのほんじ	字類抄	しょくにほんぎ
八花がた	傾城八花がた	けいせいやつはながた	新古今	いろはじるいしょう
日本武尊	日本武尊吾妻鑑	やまとたけるのみことあずまかがみ	新古今和歌集	しんこきんわかしゅう
鑓権三	鑓の権三重帷子	やりのごんざかさねかたびら	新後拾遺和歌集	しんごしゅういわかしゅう
夕霧	夕霧阿波鳴渡	ゆうぎりあわのなると	新後撰和歌集	しんごせんわかしゅう
百合若	百合若大臣野守鏡	ゆりわかだいじんのもりのかがみ	新拾遺和歌集	しんしゅういわかしゅう
宵庚申	心中宵庚申	しんじゅうよいごうしん	新続古今和歌集	しんしょくこきんわかしゅう
			新千載和歌集	しんせんざいわかしゅう
			新撰万葉集	しんせんまんようしゅう
			新勅撰和歌集	しんちょくせんわかしゅう
			新内節	しんないぶし
			新葉和歌集	しんようわかしゅう
			住吉物語	すみよしものがたり
			千載和歌集	せんざいわかしゅう
			新内、	
			新葉	
			住吉	す
			千載	せ

そ	曽我	曽我物語	そがものがたり
た	大石寺本曽我	曽我物語（大石寺本）	そがものがたり（たいせきじぼん）
	竹取	竹取物語	たけとりものがたり
ち	著聞	古今著聞集	ここんちょもんじゅう
つ	月詣集	月詣和歌集	つきもうでわかしゅう
	堤中納言	堤中納言物語	つつみちゅうなごんものがたり
と	伽、	御伽草子	おとぎぞうし
	土佐	土佐日記	とさにっき
	とりかへばや	とりかへばや物語	とりかえばやものがたり
な	長門本平家	平家物語（長門本）	へいけものがたり（ながとぼん）
に	二代男	好色二代男	こうしょくにだいおとこ
	日葡	日葡辞書	にっぽじしょ
	人、	人情本	にんじょうぼん
ね	寝覚	夜の寝覚	よるのねざめ
は	俳、	俳諧	はいかい
	八犬伝	南総里見八犬伝	なんそうさとみはっけんでん
	八笑人	花暦八笑人	はなごよみはっしょうじん
	浜松	浜松中納言物語	はままつちゅうなごんものがたり
ひ	膝栗毛	東海道中膝栗毛	とうかいどうちゅうひざくりげ
ふ	風雅	風雅和歌集	ふうがわかしゅう
	風葉	風葉和歌集	ふうようわかしゅう
	扶桑拾葉	扶桑拾葉集	ふそうしゅうようしゅう
	夫木	夫木和歌抄	ふぼくわかしょう
へ	平家	平家物語	へいけものがたり
	平治	平治物語	へいじものがたり
	平中	平中物語	へいじゅうものがたり
	ヘボン	和英語林集成	わえいごりんしゅうせい
ほ	保元	保元物語	ほうげんものがたり
ま	枕	枕草子	まくらのそうし
	万	万葉集	まんようしゅう
	万代	万代和歌集	まんだいわかしゅう
み	名義抄	類聚名義抄	るいじゅうみょうぎしょう
む	娘節用	仮名文章娘節用	かなまじりむすめせつよう
	胸算用	世間胸算用	せけんむねさんよう
や	屋代本平家	平家物語（屋代本）	へいけものがたり（やしろぼん）
	柳樽	誹風柳多留	はいふうやなぎだる
	柳樽拾遺	誹風柳多留拾遺	はいふうやなぎだるしゅうい
	大和	大和物語	やまとものがたり
よ	謡、	謡曲	ようきょく
り	霊異記	日本霊異記	にほんりょういき
	林葉集	林葉和歌集	りんようわかしゅう
わ	和名抄	倭名類聚鈔	わみょうるいじゅしょう

近代作家

あ	晶子	与謝野晶子	よさのあきこ
い	一葉	樋口一葉	ひぐちいちよう
え	円朝	三遊亭円朝	さんゆうていえんちょう
お	鷗外	森鷗外	もりおうがい
か	花袋	田山花袋	たやまかたい
	荷風	永井荷風	ながいかふう
	鑑三	内村鑑三	うちむらかんぞう
き	鏡花	泉鏡花	いずみきょうか
	虚子	高浜虚子	たかはまきょし

こ	紅葉	尾崎紅葉	おざきこうよう
さ	左千夫	伊藤左千夫	いとうさちお
	実篤	武者小路実篤	むしゃのこうじさねあつ
	山頭火	種田山頭火	たねださんとうか
し	子規	正岡子規	まさおかしき
	四迷	二葉亭四迷	ふたばていしめい
	秋江	近松秋江	ちかまつしゅうこう
	秋声	徳田秋声	とくだしゅうせい
	逍遥	坪内逍遥	つぼうちしょうよう
せ	青果	真山青果	まやませいか
	雪嶺	三宅雪嶺	みやけせつれい
そ	漱石	夏目漱石	なつめそうせき
た	啄木	石川啄木	いしかわたくぼく
ち	兆民	中江兆民	なかえちょうみん
て	鉄幹	与謝野寛	よさのひろし
	鉄腸	末広鉄腸	すえひろてっちょう
と	透谷	北村透谷	きたむらとうこく
	藤村	島崎藤村	しまざきとうそん
	独歩	国木田独歩	くにきだどっぽ
な	尚江	木下尚江	きのしたなおえ
は	白秋	北原白秋	きたはらはくしゅう
	晩翠	土井晩翠	どいばんすい
ゆ	諭吉	福沢諭吉	ふくざわゆきち
り	緑雨	斎藤緑雨	さいとうりょくう
る	涙香	黒岩涙香	くろいわるいこう
ろ	蘆花	徳冨蘆花	とくとみろか
	露伴	幸田露伴	こうだろはん
	魯文	仮名垣魯文	かながきろぶん

後　記

本書は国語辞典と百科事典とを併せた辞典として、古語から現代語までを幅広く収載するとともに、学術諸分野の専門語や人名・地名などの固有名詞をも立項し、日本語による豊かな言語生活に資することを目的として編纂された。今次の改訂においても、従来どおり、言葉の歴史的な意味変化に沿って簡明的確な語釈・解説を与えることを主眼としつつ、より一層、豊富な情報を盛り込み、使いやすい辞典とすることを目指した。

まず、日本語の足元を見つめ直すという観点から、国語項目については基礎語と古典用例の見直しに意を注いだ。基礎的な動詞および擬音語・擬態語を中心に、類義語の意味の違いを的確に分かりやすく記述することに努めた。また、源氏物語・万葉集などの古典を出典とする用例について、その本文テキストを当たり直し、用例文を整理するとともに既存の語釈を再検討した。その結果、語釈の改変・修正にとどまらず見出しの変更や項目の削除にまで及ぶ例も生じた。古語・近代語について不足していた項目も、少なからず補った。

一方、第六版以降の日本語の変化に対応するために、新しく定着したと考えられる言葉を新たに収録した。既存項目についても、新しく生じた意味・用法を数多く追加し、場合によっては全面的に語釈を改めた。用例については、明治期以降の実例を増補し、その言葉や語義の使われた時代や用法が理解できるように意を用いた。

百科項目については、急速な社会の変化や諸分野における研究の進展を反映し、時代に即応した解説とすることに努めた。情報科学・宇宙物理学・生物学・医学、また東日本大震災を一つの契機とした地球科学の研究の深化の成果や、遺伝子解析に基づいた動植物の分類体系の変更などを織り込んだほか、学問分野ごとに全面的に解説を見直してより平易で正確な記述となるように改めた。また、ポピュラー音楽・スポーツ・料理・アニメなど身近な項目もさらに充実させ、一方、各国の世界遺産、日本の伝統的な街並などの地名もできるかぎり収載した。

その結果、新加項目数は、国語分野と百科分野とをあわせて約一万に達した。

また付録は、第六版同様に別冊として、これ一冊で簡便な日本語のハンドブックとなるものとした。特に「漢字小字典」は、この間の常用漢字・人名用漢字の改定を全面的に反映した。

第六版刊行からちょうど一〇年を経て、ここに新版を世に問うことができるのは、各界の専門家のご協力の賜物である。左にご執筆・ご校閲にご尽力をいただいた主な方々の芳名を記し、衷心よりの感謝を申し上げる。

（五十音順　〔　〕内は担当分野）

赤居正美〔医学〕　赤松祐樹〔美術〕　安達智彦〔経済〕
安達裕之〔船舶〕　足立信彦〔ドイツ文学〕　吾妻重二〔儒教〕
有賀克彦〔化学〕　アルヴィなほ子〔イギリス文学〕　池上　彰〔言論〕
池上甲一〔農業〕　池田　宏〔武具〕　石川禎浩〔中国史〕
石坂浩一〔朝鮮地名〕　石塚　修〔茶道〕　板谷　宏〔冶金・鉱山〕
伊藤　聡〔神道〕　稲角忠弘〔冶金・鉱山〕　犬丸　治〔芸能〕
井上卓朗〔郵便〕　岩崎均史〔玩具〕　岩崎　渉〔生物学〕
岩科　司〔植物〕　植木淑子〔洋装〕　宇田川武久〔武芸〕
宇野和夫〔中国地名〕　遠藤泰生〔アメリカ史〕　大石和欣〔イギリス地名〕
太田猛彦〔林業〕　大橋延夫〔冶金・鉱山〕　大橋容一郎〔哲学〕
小笠原小枝〔洋装〕　小鹿原敏夫〔国語〕　岡村弘樹〔国語〕

奥山けい子〔芸能〕
小野展嗣〔動物〕
小野寺秀俊〔電子〕
笠木映里〔法律〕
勝方=稲福恵子〔沖縄〕
金勝廉介〔養蚕〕
川尻秋生〔日本史〕
川西真理〔音楽〕
神田秀樹〔法律〕
北森俊行〔機械〕
久馬一剛〔農業〕
黒田基樹〔日本史〕
小島静二〔歯学〕
小谷正博〔化学〕
小林善帆〔花道〕
子安増生〔心理学〕
斎藤靖二〔地球科学〕
櫻井公人〔経済〕
佐々木義之〔畜産〕
真田信治〔方言〕
三本松倫代〔美術〕
島田真杉〔アメリカ史〕
白石忠志〔法律〕
末木文美士〔仏教〕
鈴木康介〔体育〕
諏訪部浩一〔アメリカ文学〕

小倉孝誠〔フランス文学・地名〕
小野有五〔北海道地名〕
小幡純子〔法律〕
笠貫宏〔医学〕
加藤雅啓〔植物〕
唐澤昌宏〔美術・陶芸〕
川田伸一郎〔動物〕
川野訓志〔経済〕
木田章義〔国語〕
北山太樹〔植物〕
金文京〔中国文学〕
小疇尚〔地理学〕
小杉泰〔中東史・地名〕
小玉重夫〔教育〕
駒村康平〔経済・福祉〕
斎藤文子〔スペイン文学〕
坂井建雄〔医学〕
櫻井芳雄〔神経科学〕
佐藤賢一〔和算〕
澤田篤子〔芸能〕
志賀剛〔薬学〕
島谷弘幸〔美術〕
新誠一〔機械・電気〕
末永民樹〔空運〕
鈴木晶〔舞踊〕
瀬部昇〔機械〕

小塩さとみ〔芸能〕
小野雄大〔体育〕
海部陽介〔古人類学〕
柏野和佳子〔国語〕
金丸めぐみ〔音楽〕
川合康三〔中国文学〕
川西政明〔日本文学〕
姜由里〔音楽〕
北中正和〔音楽〕
木村龍治〔海洋・気象〕
久米順子〔南欧地名〕
小泉和子〔調度〕
小曽戸洋〔医学〕
小林学〔冶金・鉱山〕
薦田治子〔芸能〕
齋藤太郎〔化学〕
阪口弘之〔芸能〕
佐々木文彦〔国語〕
佐藤朝美〔美容〕
サンキュータツオ〔サブカルチャー〕
渋川浩一〔動物〕
白石太一郎〔考古学〕
新谷尚紀〔行事〕
鈴木健一〔日本文学〕
鈴木眞弓〔鷹狩〕
相馬太郎〔製紙〕

祖田修〔農業〕
髙田倭男〔服装〕
武内進一〔アフリカ地名〕
田嶋明日香〔国語〕
田中伸一〔言語学〕
田辺昌子〔美術〕
玉村禎郎〔国語〕
辻芳樹〔飲食〕
寺内直子〔芸能〕
冨田幸光〔古生物〕
友添秀則〔体育〕
中島楽章〔中国史〕
中林正雄〔医学〕
中村尚明〔美術〕
長屋尚典〔言語学〕
西海功〔動物〕
野川美穂子〔芸能〕
長谷川公一〔社会学〕
服部茂幸〔経済〕
原武史〔皇室〕
平沢達矢〔生物学〕
福井信子〔北欧文学〕
藤井健三〔紡織〕
藤井秀樹〔経済〕
黄光偉〔土木〕
布袋敏博〔朝鮮文学〕

高木和子〔日本文学〕
髙橋陽一郎〔数学〕
武田正倫〔動物〕
田島木綿子〔動物〕
田中ひかる〔ヨーロッパ史〕
谷口将紀〔政治〕
塚本麿充〔美術〕
筒井賢治〔ギリシア・ローマ〕
徳丸吉彦〔芸能〕
冨永望〔日本史〕
豊島正之〔キリシタン〕
中田一郎〔古代オリエント〕
中村逸郎〔ロシア史〕
中村暢男〔化学〕
中山和芳〔人類学〕
西村義樹〔言語学〕
野田公夫〔農業〕
長谷部恭男〔法律〕
服部倫卓〔ロシア・東欧地名〕
原田一敏〔刀剣〕
平本智弥〔国語〕
福家崇洋〔日本史〕
藤井省三〔中国文学〕
藤井康正〔電気〕
星野和子〔国語〕
保屋野初子〔環境〕

髙嶋修一〔経済・鉄道・陸運〕
高橋蓉子〔香道〕
竹村瑞穂〔体育〕
伊達淳一〔写真〕
田中淑江〔和裁〕
玉井哲雄〔情報科学〕
辻正博〔中国史〕
鉄野昌弘〔日本文学〕
戸部博〔生物学〕
友国雅章〔動物〕
中澤正夫〔医学〕
中田裕康〔法律〕
中村達也〔経済〕
中村秀樹〔キリスト教〕
難波成任〔農業〕
根本想〔体育〕
延山英沢〔機械〕
長谷部由起子〔法律〕
濱田武士〔漁業〕
樋口美雄〔経済〕
深井和宏〔建築〕
藤井克彦〔釣り〕
藤井毅〔南アジア〕
古松崇志〔中国史〕
細矢剛〔植物〕
堀尾尚志〔農業〕

堀川貴司〔書誌〕　本庄　武〔法律〕　前川健一〔仏教〕
前田哲男〔軍事〕　松原　聰〔地球科学〕　丸井英二〔医学〕
三浦正幸〔建築〕　水上嘉代子〔和裁〕　水野直樹〔朝鮮史〕
水町勇一郎〔法律〕　三谷惠子〔東欧文学〕　峰政克義〔建築〕
宮宅　潔〔中国史〕　宮地隆廣〔南米地名〕　宮本圭造〔芸能〕
村松真理子〔イタリア文学〕　最上敏樹〔国際〕　桃木至朗〔東南アジア〕
森　肇志〔法律〕　門間貴志〔映画〕　八木尚子〔飲食〕
八代嘉美〔生物学〕　安岡治子〔ロシア文学〕　山口幸夫〔原発〕
山中玲子〔芸能〕　山内由理子〔オセアニア地名〕　山本佐和子〔国語〕
吉川夏彦〔動物〕　吉田　進〔通信〕　吉永武史〔体育〕
六反田豊〔朝鮮史〕　若尾政希〔日本史〕　鷲谷いづみ〔生物学〕
和田純夫〔物理〕　渡部潤一〔宇宙〕

木田章義氏には、国語項目の総括責任者として、古典用例の見直しを中心とした既収項目の改修、新規収録項目の選定・校閲、付録の日本文法概説の執筆など、多方面にわたり懇切なご指導・ご教示をいただいた。長期間にわたる格別のご尽力に御礼申し上げる。

新村出記念財団では、藤本幸夫代表理事、吉野政治・佐藤昭裕両業務執行理事をはじめ、玉村文郎前代表理事、遠藤邦基前業務執行理事ほか理事・評議員の各位から貴重なご教示・ご提言を賜った。

用例として、過去の新聞記事からの引用を新たに数多く掲げたが、これには神戸大学経済経営研究所の「新聞記事文庫」を活用させていただいた。

挿図は、旧版以来、羽石光志・村田道紀・岸佳孝・楠原綾子・黒木修・佐野裕彦・矢崎芳則・石川和夫・鈴木勝久・高田装束研究所・藪内正幸・梅村有美・大片忠明・香取良夫・北原志乃・北山太樹・中島睦子・福田竹代の諸氏によるものであるが、今回さらに新規の挿図を大片氏・矢崎氏および菊谷詩子氏に描き下ろしていただいた。なお、第五版までは牧野四子吉・佐伯義郎両氏執筆の挿図を多数使用させていただいた。

装丁は初版以来、安井曾太郎氏の手になるものである。外函の写真はInmagine123RF 株式会社のお世話になった(sin32©123RF.com)。

以上のほか、ここにお名前を記さなかったが、数多くの方々・諸機関のご助力に与った。また、日常的に読者の方々からいただくご指摘・ご教示は、改訂において欠かせない大切なものとなっている。

大日本印刷およびＤＮＰメディア・アートの方々にはコンピューターを駆使した編集資料の作成と組版・印刷において、王子エフテックスの方々にはより薄く高品質の本文用紙の開発・抄造において、牧製本印刷・松岳社の方々には堅牢で使いやすい造本において、多大なるご尽力をいただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

本書は全面改訂になる新版であるが、旧版がその基礎になっていることはいうまでもない。末尾ながら、初版から第六版までにご協力いただいた主な方々の芳名を併せ掲げて銘記したい。

会津　晃　相場芳憲　青木和夫　青木淳一　青木芳夫
青野敏博　青山秀夫　青山裕彦　明石芳彦　秋山光和
明峯英夫　浅賀捷代　浅野栄一　浅野　徹　朝日　稔
浅山哲二　芦部信喜　足立己幸　阿辻哲次　阿部正昭
阿部宗明　阿部龍蔵　網野正明　鮎沢啓夫　荒川正明
荒木　茂　有賀鉄太郎　有野健二　粟田賢三　粟津則雄
安藤正人　飯島篤信　飯島宗一　飯田　隆　生田真人

池　享　池内　紀　池上甲一　池上禎造　池田良穂
伊沢利久　石井恒男　石井とめ子　石井素介　石居　進
石川忠久　石川　統　石川博友　石島庸男　石田蕙一
石原享一　磯野直秀　井田郁子　井田昭三　板垣雄三
板坂　元　市古貞次　市村　宏　井手誠之輔　伊東　孝
伊東光晴　伊東泰治　伊藤亜人　伊藤紘一　伊藤　聡
井戸田　侃　稲沼瑞穂　稲谷祐宣　乾　昭三　猪野謙二
井上和夫　井上卓朗　揖斐　高　今泉吉典　今島　実
今西錦司　今道友信　岩井　保　岩佐　安　岩田進午
岩田靖夫　岩鶴素治　岩本武和　植木俊哉　上路雅子
上杉一紀　植田浩史　上野俊一　上原行雄　鵜飼耿子
浮田典良　牛島信明　内川芳美　宇野和夫　宇野脩平
宇野直人　梅田博之　浦野春樹　浦本昌紀　浦山政雄
江口圭一　海老沢　敏　江守名彦　遠藤　彰　王　郁良
大海原　宏　大木　康　大久保恵子　大笹吉雄　大杉　直
大隅和雄　太田博太郎　大高順雄　大谷伊都子　大谷啓治
大築邦雄　大野　晋　大野盛雄　大場秀章　大橋洋一
大森志郎　大森　彌　大矢順正　大矢真一　岡　雅彦
岡崎哲夫　岡田恵美子　岡部洋一　岡村総吾　岡本夏木
岡山泰四　小川和男　小川政邦　荻野　博　荻原千鶴
奥田義雄　奥谷喬司　奥村茂次　奥山けい子　小倉行雄
尾崎正明　長田泰公　小塩さとみ　小田　亮　越智信也
落合正行　小野　晃　小野展嗣　小野幹雄　小野　和
小幡純子　小原　巌　小原秀雄　海保博之　加賀見　宏
柿島　真　鍵和田釉子　笠原　潔　笠原　嘉　風間喜代三
笠松宏至　柏木英彦　柏谷博之　数阪孝志　片山孝次

香月裕彦　加藤和人　加藤房之助　加藤正信
加藤雅啓　香取忠彦　金岡　孝　金子幸彦　上岡直見
神沢栄三　上参郷祐康　神谷栄子　亀井　理　鴨　武彦
蒲生正男　辛島　昇　川出敏裕　川田伸一郎　川中　豪
川那部浩哉　川端香男里　河原輝彦　河鰭実英　河村まち子
川本信正　神田秀樹　菅野博史　菊地隆俊　岸　春雄
北川忠紀　北澤憲昭　北中正和　北村一親　北村四郎
北村哲郎　北森俊行　北山太樹　吉川英史　吉川周平
木下法也　木下雅夫　木村正中　木村龍治　久馬一剛
金田章裕　久城育夫　工藤昌伸　国原吉之助　窪田暁子
窪田隼人　久保田　篤　久保田　淳　熊倉功夫　熊野谿　従
久米康生　倉田喜弘　倉谷　滋　栗原　彬　黒岩俊郎
桑野　隆　桑原靖夫　郡司すみ　郡司正勝　小嶋　尚
小泉和子　小泉文夫　鯉沼秀臣　郷家忠臣　香西　茂
河野照哉　河野元昭　古賀弘人　古在由秀　越田　稜
小島晋治　小島　毅　小島六郎　小杉　泰　後藤佐吉
後藤文康　小西正泰　小林恵之助　小林祥次郎　小林　忠
小林行雄　駒井　卓　小松寿雄　五明紀春　米井力也
薦田治子　近藤政美　西条八束　斉藤　孝　斉藤　保
斎藤秋男　斎藤　忠　斎藤靖二　斎藤良輔　佐伯義郎
佐賀卓雄　坂井建雄　酒井忠康　阪口　豊　阪倉篤義
坂田昌一　坂田貞二　坂梨隆三　坂部　恵　崎山耕作
櫻井英樹　桜田勝徳　佐藤喜代治　佐藤忠男　佐藤芳彦
真田信治　澤田篤子　沢田茂生　塩崎平之助　重冨真一
鎮目和夫　志田延義　篠田純男　柴田南雄　芝原拓自
渋川浩一　島　健二　島薗　進　島田周平　島田真杉

島田康行　島村福太郎　清水　功　清水茂夫　清水多吉
清水哲郎　清水禮子　下田正弘　下斗米伸夫　下宮忠雄
寿岳文章　白井佐敏　白石太一郎　白藤礼幸　新　誠一
真貝哲夫　進士慶幹　神保博行　新村　猛　新村　徹
新村秀一　新村祐一郎　末木文美士　末永民樹　末永雅雄
杉田英明　杉村　新　杉山茂雄　鈴井孝仁　鈴木章生
鈴木一雄　鈴木敬三　鈴木重武　鈴木　泰　鈴木英夫
鈴木　博　鈴木眞弓　須山名保子　諏訪兼位　関野　雄
瀬部　昇　祖田　修　曾根正人　高木公明　高木昭作
高木貞二　高榎　堯　高崎宗司　高田倭男　高野　修
高橋和之　高橋新太郎　高橋　進　高橋　壮　高橋秀雄
高橋秀俊　高橋秀直　高橋宏志　高宮利行　高本　茂
高山　宏　滝　保夫　滝本　敦　武　純一郎　竹石　健
竹内郁雄　竹内啓一　竹内美智子　武内寿久禰　竹田美文
武田政一　武田正倫　立間祥介　巽　信晴　伊達淳一
立平幾三郎　田中公明　田中　茂　田中千代　田中　琢
田中洋介　棚橋　諒　谷垣内和子　谷口安平　谷村友一
田畑茂二郎　田原　胖　田村悦一　田村芳朗　千野香織
千野光茂　鎮西清高　塚本洋太郎　築島　裕　月溪恒子
辻　惟雄　辻　正美　辻　芳樹　土田英三郎　土田直鎮
土屋信一　堤　精二　恒川邦夫　都留重人　寺内直子
寺澤捷年　暉峻衆三　東儀和太郎　道家忠道　道家達将
融　道男　十川信介　徳善義和　徳田御稔　徳丸吉彦
戸倉英美　利光和彦　戸田禎佑　富田眞治　富田幸光
富永五郎　富山太佳夫　友国雅章　朝永振一郎　豊田利幸
豊田美佐子　鳥居修晃　鳥飼浩二　鳥越文蔵　直江清隆

直江広治　仲　新　永井　和　長尾雅人　中川千咲
中川　裕　中川信義　中口　博　中島平三　中務哲郎
中野　安　永原慶二　長堀祐造　中村桂子　中村健之介
中村誠太郎　中村達也　中村英勝　中村靖彦　中村幸彦
中村義雄　中本　悟　中山貢一　中山　茂　中山信弘
中山典之　中山右尚　名児耶　明　奈良原武士　成瀬　治
南条正明　西海　功　西川　治　西川大二郎　西川正雄
西久保浩二　西田　誠　西田　稔　西田善夫　西野春雄
西村清和　西村健一郎　西村太良　仁田旦三　二野瓶徳夫
二宮　敬　二瓶貞一　二村隆夫　沼野充義　沼辺武捷
能沢慧子　野家啓一　野白喜久雄　延山英沢　野間　恒
野本憲一　野本陽代　野谷文昭　波木居斉二　萩原博光
橋　秀文　橋浦泰雄　橋本　勇　橋本典子　長谷川公一
長谷川孝治　長谷川鎮雄　長谷川太郎　長谷川　博　長谷部恭男
長谷部由起子　羽田　昶　服部岑生　羽鳥光俊　羽石光志
羽田　明　浜田博男　浜田道代　浜野　智　早川庄八
林　和生　林　晃史　林　茂　林　勉　林　徳栄
林　雄次郎　林　理介　原　幸治　原　武史　原　広司
原　不二夫　原　正敏　原　光雄　原口三郎　原田英司
原田勝正　原田泰夫　針生一郎　針谷順子　春名好重
坂東三郎　東辻保和　樋口正信　土方克法　日高敏隆
日高八郎　尾藤正英　兵藤申一　平井　聖　平石貴樹
平勢隆郎　平田健治　平塚和夫　平野　孝　平野宣紀
平林盛得　平山久雄　廣松　渉　笛木和雄　深井晃子
深萱和男　福田菊子　福田　正　福田秀一　福田義孝
藤井恵介　藤井省三　藤井澄二　藤井秀樹　藤田英典

藤谷俊雄　藤村正之　藤本　強　藤原　彰　藤原義一
布施　温　古川　久　古沢常雄　古田　啓　北条元一
芳地隆之　保志　恂　星野和子　星野　朗　細矢　剛
布袋敏博　堀　喜望　堀　敏一　堀尾尚志　堀川貴司
堀越増興　堀本武功　本城市次郎　前嶋信次　前田金五郎
前田哲男　牧野亥之助　牧野四子吉　真下信一　町田　健
松浦啓一　松尾尊兊　松尾幹之　松木　哲　松崎光久
松下　洋　松島利行　松平千秋　松中昭一　松永美穂
松波弘之　松原　聰　松原秀一　松山貞夫　松山隆司
間野英二　三ヶ尻　浩　三木弼一　水沢　勉　水谷静夫
水谷　仁　水野一晴　水野広祐　水野直樹
水野　稔　水野弥穂子　溝口雄三　三井　誠　三谷栄一
蓑輪顕量　峰岸　明　宮内泰介　宮城音弥　三宅徳嘉
宮坂宥勝　宮沢福治　宮地伝三郎　宮島　洋　都城秋穂
宮原誠一　宮本久雄　宮本久義　三好行雄　村上重良
村上政博　村瀬信也　村田孝子　村田道紀　村田雄二郎
最上敏樹　森　鹿三　森　壮也　森　タミエ　森　竜吉
森末義彰　森田　武　守屋秀夫　諸星静次郎　門間貴志
八木　冕　安井曾太郎　八杉竜一　八十島義之助　矢田　勉
柳川和夫　柳沢　孝　矢野公和　矢橋謙一郎　矢部良明
山内秀文　山形休司　山川次彦　山岸　哲　山岸徳平
山木戸克己　山口明穂　山口啓二　山口幸夫　山崎元一
山崎三郎　山崎　剛　山崎春成　山下泰文　山住正己
山田智恵子　山田有策　大和一夫　山梨俊夫　山根幸夫
山内太郎　山野辺五十鈴　山本　章　山本恪二　山本幸司
山本尚三　山本武夫　山本洋輔　山脇直司　湯浅　明

湯川　制　湯川　武　湯川秀樹　湯嶋　健　横道万里雄
吉岡甲子郎　吉岡真之　吉田　進　吉田　裕　吉原健一郎
依田　新　米川明彦　米川良夫　米田正基　米山徹幸
若尾政希　和久田康雄　鷲野正明　和田春樹　和田　勝
和田洋一　和達清夫　渡辺照宏　渡辺敏夫　渡辺仁史

二〇一七年一二月

岩波書店　辞典編集部